

天 界

第220號 (第 19 卷)

(昭和14年) 8 月 號

卷頭

宇宙を觀る、人生を觀る

隨筆

山 本 一 清

五月の末に北京を發つて、天津から船に乗り込んだ其の日から、同伴した英子が病氣を訴へ、大連に着いてからも、星ヶ浦のホテルで床に就いたまゝ、自分が滿洲の奥地を講演旅行中も、依然として快癒せず、それどころか、六月の中頃ハルビンから大連に歸つて來た時には、英子は其の數日前にホテルから病院へ引き移つたと聞き、間然たらざるを得なかつた。病氣は、初めは感冒であつたものが、腸カタルとなり、次でリウマチ性の全身神経痛に變つて了つた。六月の末になつて、容態は幾らか良くなつたやうに見えたので、醫師や親友たちのすゝめもあり、思ひ切つて病人を船に乗せ、幸ひにも珍らしい平隱な航海をなし、更に、神戸から京都までは自動車に、出迎えの二兒も付き添ひつゝ、漸く宅までたどり着いたのであつたが、宅で直ぐさま床に横臥させると、間もなく體温は40°にも昇つたので、驚いて醫師の診断を乞ふところ、心臟瓣膜炎に悪化したと言はれ、即日看護婦2人を雇ひ、絶對安靜を持するうち、3ヶ日後に、更に子宮の故障を發見され、愈々重態となつて了つた。——こんなわけで、四ヶ月ぶりに歸朝して、自分は、會ふべき人もあり、報告すべきこと、相談すべきこと、整理すべき雑事など、全く放擲して、全家一致、病人の看護に努めた。昨今に至つて、漸く病氣は快方に向ひ、家のものどもも愁眉を開いたといふ仕末である。

遠近から聞き傳へて、見舞ひを受けた親族や知友たちの中に、二三日前、來訪された一醫師があつた。この英子の病中、我々としては、只、主治醫の人格と手腕とに信頼して、心配のうちにも希望を失はず、日々を過したことを自分は此の友に語つたところ、友は：

“いや、君が醫者でなくて、天文學者であつたがため、左様な沈着と希望とを有ち續けることが出来たのです。若し醫師の家族の一員が此んな病氣でもした場合であるとすると、とても其んなことでは納まらない。醫師といふものは、家族が病氣した場合など、専門家である悲しさに、すぐ最悪の場合を豫想して主人が先づ狼狽し始め、とても落ちついては居られないものです”云々、と言はれ、“なるほど、なるほど”と、自分にも大に思ひ當る所があるやうに覺えた次第である。

自分は、醫者ではないため、醫術や病氣のことは知らないが、一天文家として立つてゐるため、實は、平常にも、普通の人々の感じない心配を少なからず經驗する。尤も、近年は幾らか歳をとつたせいも、よほど人なみに近づいて來たやうであるが、恰も電氣學者がカミナリを恐れ、醫學家が傳染病の豫防注射を受けたがらないのと同様、若い時には、船に乗つても、船長の手腕を疑がつたり、天氣豫報を聞いても、氣象臺の判斷の裏の裏まで心配したり、或る場合には、何時この自分の頭上に隕星が落ちて來ないとも限らないと氣遣つたり、ポケットに一つの時計では不安だと考へて、三つも四つも時計を携帯しやうとしたり、とにかく、他人から笑はれさうなことを、かなり考へて、心配したりしたものである。これ等は皆、素人には了解し得ない“くろう人の惱み”である。

世が進むにつれて、一般の素人の人々を尻目にかけて、くろう人は益々くろう人らしくなつて行く。殊に今日のやうに、世の中の萬般が細かく分化して行けば行くほど、所謂“くろう人”が各方面に増して行き、そして其のくろう人の社會的存在が著しく眼について來る、終ひには、政治も宗教も皆一種のくろう人の跳梁する世界となつて了らう。しかし、自分は常々思ふところであるが、一體この“くろう人”といふものは、極めて狭い分野に於いて、只、極めて深く知識と手腕とを有ち合はせる人々である故に、其の分野に於いては甚だ重要な存在であり、且つ尊敬される價値を有つ人々ではあるけれど、其の代り、社會全體から見ると、其の視野がせまく、膽力に缺け、自信（否、むしろ自惚）が強く、常識の不足するなど、一面から見ると、缺點の非常に多い人々である。

天文家の間に於いても、こうしたくろう人と素人との區別は、今は至る所に見出されるのであるが、上記の理由によつて、所謂“くろう人”は皆“其の専門のプロフェッショナル”

野に於いて”といふ條件付きでのみ、尊敬されるべきであると同時に、“素人”^{アマチュア}といふものを、決して玄人は侮つてはならない。素人は、視野の廣い點に於いて、専門に囚はれない自由人である點に於いて、又、判斷力の正しい點に於いて、研究對象と社會とに對して常に謙虚な態度を有つ點に於いて、玄人の有ち得ない美點が非常に多い。一體、本來から言へば、學術の研究などといふことは、こうしたアマチュアらしい態度によつて始めて實現される筈のものであつて、むしろ、偉大なる素人の下に於いて、玄人が働いてこそ、研究の最も健全な發達が豫期されるのである。

こういふ見地から見ると、大局から考へて、我が日本の、——たゞに天文學界のみと言はず——一般の學界は猛省すべきことが多いやうに思ふ。殊に我が國の學者の大多數は官吏であり、官吏であるが故に、豫算に縛られ、服務規律に縛られ、熱意を缺き、創造力に劣り、そのくせ、氣位が高く、消極的で、自己の榮進のみに腐心する徒輩が多い。之れを外國の學者と比べて見ると、外國では學者は多く自由人であり、何ものにも囚はれず、常識に富み、研究を心から楽しみ、積極的で、研究のためには、寢食を忘れ、自己の榮達や、社會的名譽を顧みないといふ勞働氣中に生きてゐる。即ち、換言すれば、我が國の學者は多く官僚的乃至俗吏的であるに對し、外國の學者らしい學者中には、超俗的で、自由人型で、アマチュアと一脈相通する心意氣を有つてゐる人が多い。國際的見地から見て、評判の割合に、我が國の學界が奮はない原因が此うした點にあると思はれる。

此等の點、大に考へなければならぬ。(七月十日)

★ 七 夕 ★

今 夜 織 牛 會	交 情 河 漢 邊
風 來 侵 彩 幌	月 動 落 花 筵
盛 俎 紫 珠 果	寫 箋 金 玉 篇
仰 天 人 乞 巧	祭 祀 二 星 前